

会津の歴史シリーズ



第2回 会津の歴史① (古代～葦名・伊達時代)

中岡 進 (なかおか すすむ)

若松城天守閣郷土博物館
副館長・学芸員



◆会津のはじまり

「会津」。この地名の由来は、『古事記』によると、3～4世紀ころの崇神天皇の時代に、奥州(蝦夷)を平定するために、四道将軍として日本海沿いに東進した大彦命と、東海道を平定した後に太平洋沿岸を北上した建沼河別命が、ともに内陸方面へ向かって合流した地点とされ、「水辺」＝「津」で出会ったことから「相津」となったことが語源とされている。この水辺が阿賀川などの河川を指しているのか、あるいは猪苗代湖を示しているのかははっきりしないが、そうした内陸部でありながら当時から豊かな水資源を持つ場所であったことはうかがい知ることができる。

一方、会津においては、そのころの豪族のものと思われる古墳がいくつも発見され、特に会津若松市街地の北東に位置する大塚山古墳では、東北地方最大級という前方後円墳から中国大陸より伝えられたと思われる「三角縁神獣鏡」が出土し、西国にも名声が知られるほどの有力者がいたことも容易に推測される。つまり四道将軍がたまたま出会ったのではなく、土地の有力者として会津に

いた人物を訪ねてきたというところであろう。残念ながらその人物が誰なのか、資料としての手ごかりはないが、自然災害を受けにくい内陸部にあって、広い平野と豊かな水資源を有する会津は稲作にむいた豊かな土地であり、この肥沃な土地を巡って地域的な争いがあり、支配することになった人物は中央とのつながりがあり、近隣へ強い影響力を及ぼす、古墳が築かれるほどの存在だったであろう。

また会津には仏教の伝来も早かったと伝えられている。仏教も大陸からの影響を強く受けており、日本への伝来が6世紀中ごろとされているのに、ほぼ同じころに会津へも伝わったという記録が残っている。また福島県のほぼ中央に位置する磐梯山も、会津においては「日出づる山(＝東方に位置する)」として、信仰の対象として崇められた。

やがて京都からやってきた僧徳一によって、仏教は会津で広く展開されることとなり、会津盆地に五つの薬師如来を本尊とする寺が置かれ(五薬師)、そのうちの一つである恵日寺は国内でも屈

指の力を有する寺へと変わっていった。当時の寺は、僧兵と呼ばれる武力集団を多く抱えていて、他所の騒動にも兵を送り、結びつきを深めていった。特に平氏系の越後の城氏との協力関係が強く、城氏が信濃横田河原で源義仲と交戦（1181年）した際には、恵日寺から衆徒頭の乗丹坊を筆頭に大軍を派遣した。しかし戦いに敗れ、城氏とともに恵日寺の勢力も急激に衰えたという。

◆葦名氏による会津支配

平氏との戦いを制した源頼朝は鎌倉に幕府を開くと、働きに応じて武将たちにほうびとして土地を与えた。相模国（現在の神奈川県）三浦半島の豪族だった佐原義連に会津が与えられることになり、途中で葦名と姓は変わるが、子孫らは20代400年にわたって会津の支配者として君臨した。ただし、実際には三浦半島に居住し続け、会津の直接の統治者となるのは足利尊氏との争いに敗れ会津入りすることになった、葦名氏7代の直盛の時代になってからである（1384年）。

直盛が会津入りした当時の領主の居館に関して

は、「東黒川館」という文字の記録しか残っていない。黒川とは当時の若松の地名であるが、館がどこの場所にあったのか、はっきりしない。ただ、葦名氏自身は家臣団を抱える武将であり、その住まいも当然防御的な縄張を配した館であったことは想像される。会津盆地の東側の山並みの間から流れ出る河川（湯川、当時の名称は黒川）の扇状地として形成された、現在鶴ヶ城が建っているあたりと考えてもいいだろうし、あるいはもう少し高台の、山城的な位置に構えられていたとも考えられるところである。

そのころの東北地方の勢力図としては、平泉（岩手県）に栄華を誇った藤原氏が衰退した後、各地の土着の武将たちがせめぎ合う状況だった。北には伊達氏や最上氏、県内でも田村氏や二階堂氏などとの緊張関係は続いた。

16世紀の中ごろ、葦名氏16代当主となった葦名盛氏は、その勢力を拡大させて葦名家として最大の隆盛を誇った。甲斐の武田信玄や相模の北条氏康などとも同盟関係を結び、越後や常陸へ出兵するなど積極的に仕掛けた。のちに武田信玄から名



木造佐原義連座像（会津若松市宝町 極楽寺）
葦名氏初代の佐原義連の座像。13代葦名盛高が作らせた。

将の一人に数えられるほどの人物だったが、跡取りが早世し、彼が没すると葦名氏の勢いも急速に衰えていった。

◆伊達政宗が会津を手に入れる

わずか10年余りの間に4人も当主が替わり、葦名家20代目となったのは常陸佐竹家から養子となった葦名義広よしひろだった。しかしすでに家臣の離反が相次ぐなど求心力も無くなり、1589年に北から伊達政宗が進攻して、6月5日に磐梯山のふもとすりあげはらの摺上原にて伊達・葦名の両軍は衝突した。葦名側には義広の実家である佐竹氏も加勢していたが伊達軍が勝利し、敗れた葦名義広はわずかな供を連れて実家のある常陸へと敗走した。これにより政宗は念願の会津を手中にすることができたのである。

しかし政宗はさらなる領地拡大をもくろんでおり、黒川での領地経営にはさほど着手していなかった。というのも当時全国的には豊臣秀吉による統一が実現間近の段階にあり、大名間での私闘

を禁じた惣無事令そうぶじれいを発していたため、政宗の会津入りはこれを無視した形になっていたのだ。政宗にしてみれば、秀吉が小田原攻めを完了させれば、次は自分の所に攻撃を仕掛けてくるに違いない。自分にも天下を狙うという野望はあるが、そのために今秀吉と衝突することが得策なのか思いあぐねた。とても会津を手にして安穩としていられる状況ではなかったのである。

結局政宗は秀吉の軍門に降ることを決意し、小田原にいる秀吉の元へ参陣することとなるのだが、出発間際に実母に毒殺されそうになり、実弟の小次郎を斬殺するということがあって出立が遅れた。さらにまっすぐ小田原に向かうのではなく、一度越後の上杉景勝のもとに立ち寄ってからという迂回ルートを通ったため、小田原到着は遅れに遅れた。しかしそこで政宗は、死装束を身にまとって秀吉の前に参ったというエピソードが有名だが、処刑されることは免れて、会津の領地を没収されるだけにとどまったのである。



伊達政宗銅像（仙台市 青葉城）

奥州の覇者として名高い伊達政宗も、会津を手に入れたときはまだ20代半ばの時だった。